

かけ算九九が言えること

丹波山村立丹波中学校1年 鶴田 佳宏

僕の父は海外で働いています。そのため、僕は小学校6年まで家族みんなでアフリカのいくつかの国々に住んでいました。毎年日本に一時帰国していたのですが、日本の街並みを見て毎回思うことがありました。(日本の道路はどうしてこんなにきれいなんだろう。)

僕が住んでいたアフリカの国々は、人々は優しく、美しい自然でいっぱいでしたが、道路に関してはとてもひどい状態でした。大きな穴があちらこちらに空いていて、中央の白線も消えかけてほとんど見えませんでした。雨になるともっとひどく、雨水がたまって穴が見えなくなるのでとても危険です。父はゆっくり運転しながら、いつも「マリオカートの世界みたいだな。」と言っていました。

また、日本との違いを強く感じたのは小学校3年の算数の授業です。僕は日本大使館から日本の教科書を支給してもらっていたので、家では日本のカリキュラムにそって勉強していました。ある日の算数の授業で、僕がかけ算の問題を解いて全問正解すると、クラスみんなに「えっ、頭が壊れちゃったの?」とビックリされました。どうしてかという、その時僕のクラスではまだ、足し算を勉強していたからです。

日本では、2年生が終わる頃には、多くの小学生がかけ算の九九を言えるようになります。しかし、僕の住んでいたアフリカの国では、2年生でかけ算ができる人はほとんどいません。5年でもできない人もいました。

道路がきれいに整備されていることや、小学校2年生でかけ算九九が言えることは、どちらも税金に関係します。かけ算九九が言えるということは、四則計算などの基礎的な教育がしっかり習得できているということです。これは将来専門的な知識や技術を習うためには絶対必要です。もしかけ算ができないまま大人になってしまったら、将来「みんなが困らないようにしっかりした道路をつくる仕事に就きたい」と思っても難しいでしょう。

今回、これをきっかけに日本の教育の歴史について調べると、日本の義務教育の無償化は一九〇〇年から始まっていることが分かりました。もう一二〇年も続いていることになります。また、授業料の無償化に加えて、僕たちが使っている教科書や、先生方の給料も税金から払われていることも分かりました。このように、税金を教育のためにしっかり使い続ける積み重ねによって、教育が安定するのだと分かりました。

国が発展するためには教育がとても重要です。今の大人の人たちが納めてくれている税金で僕たち中学生が教育を受け、自分たちが大人になった時は、今度は自分が納める税金で子どもたちが教育を受けられる。税金が教育や社会づくりにつながっているんだということを、もっともっと自分のこととしてとらえたいです。そして、勉強も運動もいろいろな活動もしていこうと僕は思いました。